

精神保健・福祉に関するエビデンスのプラットフォーム構築及び 精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関する検討のための研究

研究代表者 佐藤さやか（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所）

要旨

本研究の目的は国内の実践家が効果的な実践を行うための支援として、1) 精神保健福祉サービスの効果等についてのエビデンスの収集及び分類、専門的知見を介した信頼性等の評価、2) 国内外の調査・研究等のシステマティックレビュー（Systematic review：SR）の実施、3) 1) 2) の結果等を容易に入手可能な日本語プラットフォームの構築、を行うことであった。

中西分担研究班では、PRISMA 声明（2009）に従って、精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関するシステマティックレビューを行い、最終的に英文4編、和文2編がシステマティックレビューに組み入れとなった。

山口分担研究班では、エビデンスセンターのプラットフォームとなるWEBサイトの基礎設計とコンテンツの検討を行い、WEBサイトの版の全体イメージの確定や情報提示の工夫、既存情報を活用したコンテンツ内容の充実について一定の成果を得た。

藤井分担研究班では、精神保健医療福祉のステークホルダーとして当事者、家族、支援者、行政職員、研究者を対象にグループインタビューを行った。この結果、属性を超えた関係者全体としてWEBサイトにおけるエビデンス情報について段階的な提示を望むこと、属性別の意見として、エビデンス以前にベーシックな生活/医療支援や家族支援に関する情報が必要との切実な声や、実践者のもつ抵抗感に関する意見、エビデンスだけでなく、支援の費用対効果やEBP実施する際の具体的なプラン提示が必要、との意見が聞かれた。

今年度は初年度であるため、システマティックレビューおよびWEBサイト構築についての下準備が主な活動となった。これと並行して実施したグループインタビューについては、研究班の想像以上に、ステークホルダーが必要とする情報共有がスムーズでない現状が明らかとなった。

次年度は中西分担研究班におけるシステマティックレビューの投稿を行うことに加え、藤井分担班におけるグループインタビューで得られた意見を山口分担班にフィードバックした上での新たなエビデンスセンターの構築・運用を開始する。また別研究課題で構築されているデータベースとの連携、閲覧者がワンストップで情報を集められるような工夫、エビデンス活用の利点についての発信も検討していきたい。

A.研究の背景と目的

英国の NICE ガイドラインなど、厳密な手法でエビデンスを収集し、関係者の合意に元に定められた診療ガイドラインが国際的には医療/保健の支援現場や医療経済に大きな影響を与えるようになっている（藤井，2016）。他方、わが国の精神保健領域においては、依然として支援者の経験則が提供される支援の根拠となっている場面が散見される。この背景に、国内の望ましい実践（Good practice: GP）に関する資料が広く共有されていない、海外のエビデンスに関する情報発信が少ない、の2点があることが推察される。については研究活動の一環としてとして展開された GP は実践家にとってはなじみが薄く、また実践家自身からの発信は事例報告が多いため、システム全体の均てん化に必要な情報に乏しい、といった要因が関係していると思われる。については厳密な手法を用いた研究の多くが英語の医学データベースに掲載されているため、情報のアクセシビリティに問題がある。そこで本研究では国内の実践家が効果的な実践を行うための支援として、1) 精神保健福祉サービスの効果等についてのエビデンスの収集及び分類、専門的知見を介した信頼性等の評価、2) 国内外の調査・研究等のシステマティックレビュー（Systematic review：SR）の実施、3) 1) 2) の結果等を容易に入手可能な日本語プラットフォームの構築、を行うことを目的とする。

B.方法

1．中西分担研究班

システマティックレビューの最新のレポートガイドラインである PRISMA 声明（2009）に従って、精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関するシステマティックレビューを行った。

2．山口分担研究班

エビデンスセンターのプラットフォームとなる WEB サイトの基礎設計とコンテンツの検討を行った。WEB サイトの基礎設計については、実際にサイトの構築を行う分担研究者板垣と WEB サイトのイメージおよび構造について検討を行った。また令和 2 年度秋以降に WEB サイトの 版の運用を開始するにあたって、NCNP 内の関係部署と役割分担や著作権の観点から掲載可能なコンテンツの範囲などについて合議を行った。

コンテンツの検討については本研究課題で実施予定の「精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関するシステマティックレビュー」に加えて、重症精神障害をもつ人の地域生活支援に関する既存のコンテンツで情報を紹介できるものがないか検討を行った。

3．藤井分担研究班

精神保健医療福祉のステークホルダーとして当事者、家族、支援者、行政職員、研究者を対象に「治療や実践のエビデンスを集めた情報サイトにどのような内容をどのように載せたらよいか?」「専門家に知っておいてほしい支援や実践とはどのようなものか」「厳密な研究によるエビデンスの確立していない支援や実践を取り扱うべきか?」という問いについてグループインタビューを行った。

C.結果 / 進捗

1．中西分担研究班

論文検索の結果、Web of science で 2,827 編、PsycINFO で 1,553 編、CINAHL で 967 編、MEDLINE で 3,983 編、医中誌で 762 編の論文がヒットした（PECOS および検索式については中西分担研究班報告書を参照のこと）。重複を除いた 9,442 編が一次スクリーニングおよび

適格性検討の対象となった。最終的に英文4編、和文2編がシステムティックレビューに組み入れとなった。

2. 山口分担研究班

WEBサイトの基礎設計について、サイト全体はイラストを用いた親しみやすく、シンプルで迷わないデザインとすることを基本とした。版のトップページ案を作成した。また、エビデンス提示の方法としてEPBの一覧を示す方法に加えて、「精神疾患をもつ人が退院したらどうなるの?」といったClinical questionを一般的なWEBサイトにおけるFAQのような形で示し、そこからさらに閲覧者のもつ疑問にあった質問をクリックしていくと、関係するエビデンスにたどり着くというような構造を着想した。実践家になじみのある論文化された実践報告の抄録掲載も検討中である。

コンテンツについては、研究班が実施する「精神科長期入院患者の退院促進後の予後に関するシステムティックレビュー」に加えて、Cochrane libraryから重症精神障害(統合失調症、双極性障害、大うつ病)の地域生活支援に関するレビューを選び、これらのPLSを和訳し、Cochrane libraryに掲載を依頼、発行されたURLをエビデンスセンターのWEBサイトにリンクする枠組みについて体制を整備した。

3. 藤井分担研究班

グループインタビューの結果、エビデンスの提示方法についてはタイトル、抄録、イラストや図で支援の効果の程度を簡単に示す、研究の概要についてできるだけ数値を使わずに説明する、の2段階での提示が希望された。

属性別の意見として、当事者や家族からはいわゆるエビデンスベースな支援プログラムではなく、もっとベーシックな生活/医療支援に関する情報が必要、家族からはそもそも家族自身が支援の対象として認

識されておらず、必要なサポートが届いていないという切実な実情について語られた。

研究者、実践家からはエビデンスについて、実践者のもつ抵抗感についても語られ、行政職員からは支援の費用対効果やEBPを実施する際の具体的なプラン提示が必要、との意見が聞かれた。

D. 考察

今年度は初年度であるため、システムティックレビューについては組み入れ論文のスクリーニングまで、またエビデンスセンターとなるWEBサイトについては版作成の下準備が主な活動となった。

グループインタビューについては、多様な属性の参加者から非常に有意義な意見を得ることができた。研究班内でも実践者のもつエビデンスへの抵抗感については問題意識を持っており、それが本研究課題のリサーチクエストであった。しかし、現状では想像以上に、ステークホルダーが必要とする情報共有がスムーズでないことが明らかとなった。新たなエビデンスセンターの構築・運用に加えて、別研究課題で構築されているデータベースとの連携、閲覧者がワンストップで情報を集められるような工夫、エビデンス活用の利点についての発信が必要と思われる。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

追加予定

2. 学会発表

吉田光爾, 宮本有紀, 後藤雅博, 澤田恭一, 佐藤さやか, 神谷牧人: 学会企画シンポジウム地域ケア(コミュニティメンタル

ヘルス)を推進するために研究と実践をどうつなぐか：私たちにできることは何か．
第27回日本精神障害者リハビリテーション学会大阪大会，大阪，2019.11.24.

G. 知的財産権の出願・登録状況

1.特許取得

なし

2.実用新案登録

なし

3.その他

なし

加えて、実践家、当事者・家族のもつエビデンスへの抵抗感についてはエビデンスの示し方に工夫することに加えて、エビデンスを活用することの利点についても発信していく必要性が感じられた。

E.健康危険情報

なし

F.研究発表

1.論文発表

なし